

神

スピノーザ

020322-000-9

特53-546

神

スピノーザ/著

図版

M39

ABI-0128



0000000000

# 示神

大ビノ一ガ原書  
齋木仙醉評釋

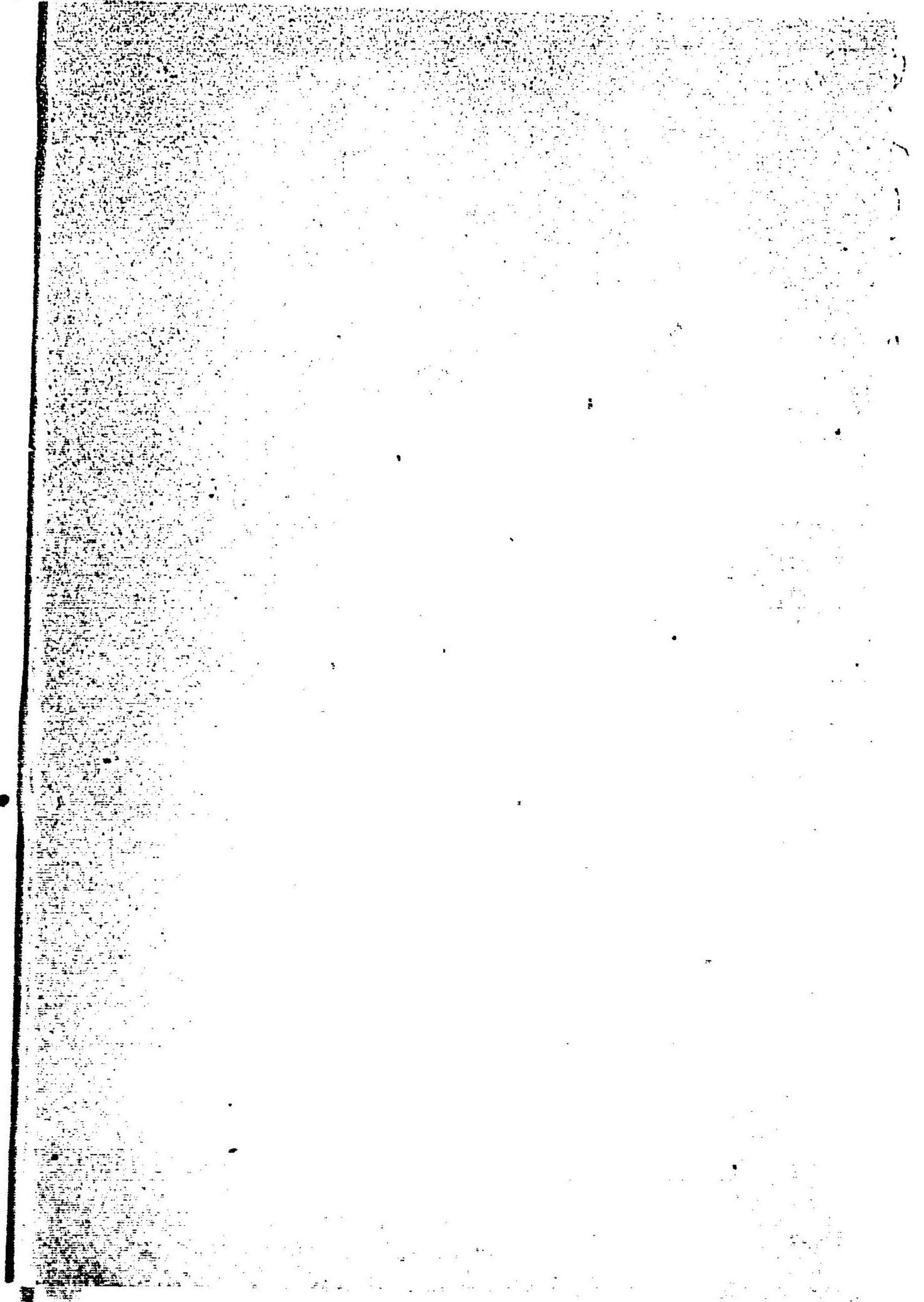
253
132

多木仙碎

特53  
546



ザノビス



除却  
同

西香  
不固  
能

醉木仙  
寄贈本



秀才の昔憶ふかな  
煙立て  
送りたる

げに一卷のエテイカこそ  
寂寞をこめし森蔭か  
そも永劫の智日照る

茫々一如の滄海か

神に酔ふてふ大哲の

迦藍に我も遊ばまし

耶穌を神子と名づけ得ば

君は無邪氣の神童

# 神 自 次

## 序 論

一項	哲學の大結晶	一
二項	自然科學との關係	二
三項	其の説明	四
四項	意志不自由説の採用	五
五項	社會主義との關係	六
六項	處世の指導者	七
七項	世界八大奇蹟の一	七
八項	難解と壯快	八

本論

一 項 三大概念……………十

二 項 本 體……………十

三 項 屬 性……………十一

四 項 狀 態……………十三

五 項 本體即神……………十四

六 項 懷疑の地步……………十四

七 項 眞知見……………十六

八 項 唯一神論者……………十七

九 項 萬有必然論の根據……………十八

十 項 因果律……………二十

十一 項 器械的宇宙觀……………二十三

十二 項 宇宙無目的論……………二十四

十三 項 萬物は人間の爲に存せすとの説……………二十六

十四 項 此の誤想の原因は利用心……………二十七

十五 項 自然宗教の生因……………二十九

十六 項 祭神の根源……………三十一

十七 項 造物神論者打破……………三十二

十八 項 無上の毒説か否か……………三十五

十九 項 宇宙有目的論の弊害……………三十八

二十 項 無智識てふ避難所……………三十九

二十一 項 無善惡美醜論……………四十二

二十二 項 趣味無標準論……………四十四



二十三項 空名論……………四十八

二十四項 宇宙的氣魄……………五十

二十五項 一元的平行論……………五十二

二十六項 思考と延長……………五十五

二十七項 無限的思考者……………五十六

二十八項 心と物との特殊の本領……………五十七

二十九項 觀念と事物との秩序結合の一致……………五十八

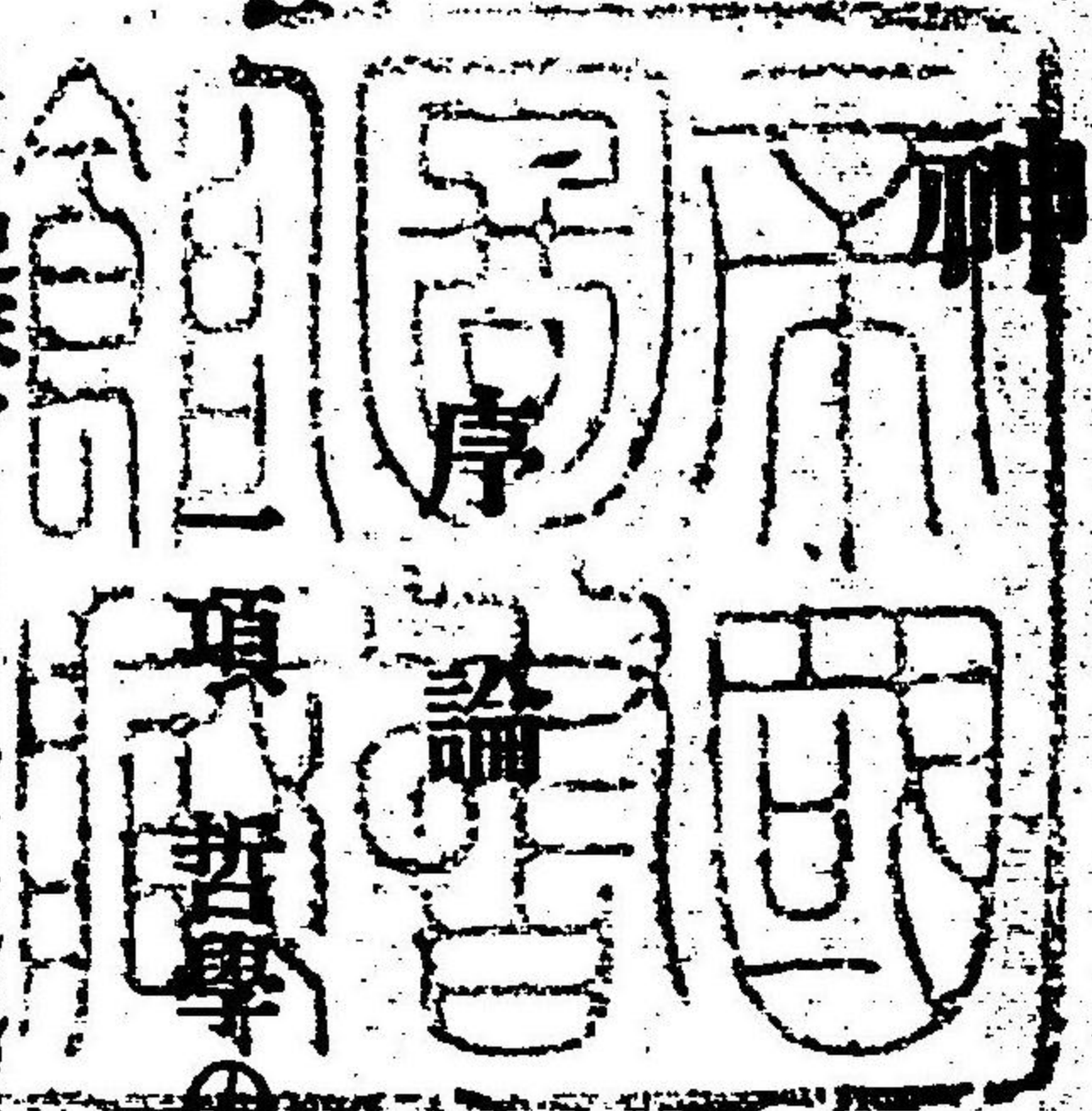
三十項 空想即實在論……………五十九

三十一項 空想大道徳論……………六十一

三十二項 神 人……………六十四

三十三項 大斷案……………七十二

目次終



大結晶

スピノーザ原書  
齋木仙醉評釋

史家クノイナトシヤハ曰ク、スピノーザの哲學系統は哲學の一大結晶也、内容の透明は形式の嚴格と相俟ち、恰かも自然物の規則的なる構成が水晶に於て最も能く認められ得る如く、合理的なる觀念構成と議論的能力とは、スピノーザ主義に於て最も純粹に表現せられたり、茲に於ては思考は敢て汚濁なる深みの中に動亂する

ことなく、却て憂乎たる又透明なる姿を以て示現し、又光明の暈照するが如くにして、宇宙に展開し來り、宇宙には到る處としてかの悟性の代りに想像力が占めたる、暗黒なる不可解の領域を残さる也、本體の大光明の中に何等の蔭影の存せざることとは、恰かも太陽が煌々として中天に耀やく時、何等の蔭影の箇所のあるが如し。

## 二項 自然科学との關係

何等の哲學系統と雖も、スピノーザ哲學の系統の如く、爾かく自然科学と相調和するもの有らざる也、何となれば他の何等の哲學系統も、彼の、如く全然哲學て自家の本領に己を制限し、又彼の、

如く深く且つ鋭き眼光と、又彼の、如き峻嚴なる論理とを以て議論を遣りたるもの無ければ也、蓋し諸般の方面に關する現時の思想上の潮流は、實に悉く皆是をスピノーザの倫理學に淵源を有する幾多の泉に歸着せしむることを得べければ也、視よ近世の自然研究の大々的紀元を作れるかの大原則たる、勢力不滅の原則及びダルグキンの進化の原則の如き、亦是れスピノーザ主義の必然的補充又結果也、然れば人は哲學上の斯の大思想家によりて、(假令間接なりとは雖も)、幾多の精密なる自然研究に、彼等が之に従ひて以て彼等の發見を遂ぐることを得たる道途の示されたることを首肯することを得ん。

### 三項 其の説明

若し本體と其の勢力とにして、スピノーザの教へし如く、永遠的にして、始も無く、又終も無くんば、何等の勢力も滅したるものにあらざることは自明の眞理也、彼等の消失てふ言葉は畢竟他の形式（活動）への轉化より他を意味せざる也、若し自然なるものがスピノーザの教ゆる如く、決して或目的の爲にあらざして、却て唯原因に従ひてのみ行動するものとし、斯くて自然界の説明に關する總ての究竟目的觀的識見を以て知識上の迷謬として委棄せざるべからずとあし、又獨り因果律のみ總ての變化を支配するものなりとせば、然らば因果律の説明として有機體の組織に於ける合目的性を要する道

理ならずや、而して之れ正しく進化の原則の我等に與へたるものたる也、是れ吾人がスピノーザの哲學思想が近世の二大原則なるかの勢力不滅の原則と進化の原則とを懷胎したりと謂ふ所以也。

### 四項 意志不自由説の採用

人の意志と人の行動とに關しての因果律の擴張は蓋し理論上今尙は多様に議論せらるゝ處也、然れども實際的生活の種々の分派的事業に於ては此の擴張は多かれ少かれ適用せられざる莫く、而して法律の實際上に於てすらも幾分か此の擴張を容れざることを得ざるに至れり。

## 五項 社會主義との關係

共產主義に向けられたる我等の時代の社會運動も亦悦んでスピノザ倫理書の多くの章句を援用することを得ん、何となればスピノザ主義は自家防衛の權利を是認し、個人の生存權を擔保し「人は人の爲に生くべし」との人間中心思想を吐露し、社會的共同を獎勵して訓へて曰く、『人間は何よりも先づ共團を作り、而かして其の共團によりて相互に結合し、之によりて一體となり、又總て友情を鞏固にする縛てのこゝを行ふこと極めて必要也』と。又曰く、『人の公共團體は單に敵に對する防禦の爲のみならず、否多くの有要なる事物の建設の爲に善にして且つ又極めて必要也』と、是れ豈宛然として社會主義者の大精神の告白にあらずや。

## 六項 處世の指導者

人は諸種の人生問題に關してスピノザの倫理書を参考せば一般に利益多からん、スピノザの倫理書は人の情感の分拆に於て心靈生活に關して最も美妙ある觀察を保つが故に、此によりて實際生活に向ての極めて價值多き指導を受くることを得ん、然ればスピノザは吾人の處世の道を指導する爲に、精確有趣味なる大心理學を與へたるものと謂ふべき也。

## 七項 世界八大奇蹟の一

スビノーザの倫理書は思想界の紀念的大建築にして、さしも廣大なる知識の世界中何等の書も殆ど之に比較するに足らざるものなりと、其の崇拜者によりて讚稱せらるゝもの又故あきにあらざる也、然るに該倫理書が永く流行せず、又『世界の八大奇蹟』の一として認められし所以のものは、唯だ該倫理書を完全に理解することの難きに歸すべき也。吁スビノーザの豊富なる此又敬虔なる書中にある、大にして深き思想は今と雖も尙ほ唯だ其の幾分かのみ理解せられ、尊敬せられつゝあるなり、然れば總合したる知識に於ては更に大なる功蹟あるべき也。

### 八項 難解と壯快

スビノーザの倫理書は斯くの如く難解也、然れども彼の有機的結合をなせる哲學系統の理解に其の身を委ぬると能はざる讀者も亦該倫理書よりして多くの甚だ通俗に理解さるゝ且つ各人の心を照らすが如き章句を發見すべし、此時讀者に對つて其面帕を脱したる思想上の大天才の爛々たる天日の如き眼光の睥睨するとあらん、若し其れ通俗に解せらるゝ沙漠中の沃地とも謂ふべき處に踏み入らんか、思想の白銀なす泉は澄明に果た水晶の如くにして輝やきつゝ湧き來り、貴とき思想の果實の讀者の心を清涼ならしむるものあらん。

(以上序論はステルン氏より抄譯)

# 本論

## 一項 三大概念

スピノーザ哲學の三大概念は本體と、屬性と、状態との三者にて、其の定義に曰く、

- 一、本體とは獨自にして存在し、獨自にして思惟せられ、敢て之を造る他物を要せざる者と云ふ。
- 二、屬性とは本體の本質に屬せりと認識せらるゝものを云ふ。
- 三、状態とは本體の派動を云ふ。

## 二項 本體

本體の本體たるべき爲に三種の要件あり、一に曰く、自因なること、二に曰く、無限なること、三に曰く、唯一無二なること、該要件の定義に曰く、

- 一、自因とは其者の本質が存在を含む如きものを云ふ。
- 二、無限とは全種類の他物の爲に制限せられざるものを云ふ。
- 三、唯一無二とは其者の存在以外に、他の何等の存在をも許さざるものを云ふ。

## 三項 屬性

スピノーザは屬性に就きて吾人に三種の重要な思想を與へたり、一に曰く、本體に屬せる屬性の無數なること、二に曰く、屬性

は本體の本質の發現なること、三に曰く、人の悟性は唯だ延長と思考との二屬性のみを認識し得るものなること是れ也。

思へらく、本體の延長は物にして、本體の思考は心也、故に兩者は皆に本體の二方面たるに過ぎず、屬性は各自相對的無限也、然れども本體の如くに絶對的無限ならず、何となれば延長の存すると共に全時に思考も存し、思考の存すると共に全時に延長も存し、思考を支配することを得ざると共に、延長に由りても思考を支配することを得ざれば也、蓋し一切を包含するものは獨り本體のみ、延長は延長として無限なれども一切を包含するにはあらず、何となれば他に思考の存すれば也、又思考も思考として無限なれども一切を包含するにはあらず、何となれば他に延長の存すれば也。

#### 四項 状態

延長の状態は運動と静止の二つ也、又思考の状態は悟性と意志の二つ也、動と静と交々して無常なる現象世界を成立す、總ての個體即ち個物は本體の形式、然り永恒なる本體の永遠に波立つ波浪也、あゝ現象の形式は無常なれども、本體と屬性とは永遠なるかな、總ての個體は両側面を有す、一は永遠的にして、一は暫時的也、獨り本體と屬性とは永遠的也、神的也、然れども形式は暫時的也、無常的也。

遮莫、個々の状態こそ暫時的、無常的なりとは謂へ、状態の全部は有限的ならずして無限的也、暫時的ならずして永遠的也、之を具

體的に謂へば、運動は無始無終なれども、運動より生じ来る物體には存亡あり、又全体の悟性と意志とは無始無終なれども個人の悟性と意志とは消滅ありと。

### 五項 本體即神

自因にして無限に又唯一無二なりと云ふ本體を以て、スピノーザは之を神と稱せり、然れば彼は神を次の如く定義せり、曰く、神は絶對的無限者也、神は無限無數の屬性を有す

と。

### 六項 懷疑の地歩

古來哲學者中には懷疑の哲學者と確信の哲學者とあり、デトカルトは前者にして、スピノーザは後者也、視よ釋迦の如きも亦殆ど懷疑に近き言をなして曰く、

嗚呼無量よ、誰か言語を以て此の測り難きものを測らんや、誰か思考を以て極り知らぬ處に分け上げらんや、問ふ者も亦答ふる者も皆俱に迷ふ也

と、然れども此れ言語意識を以てしては、宇宙の眞理を捉み得ずとの意にして、佛佗の語が覺者を意味する限りは、決して宇宙無眞理は釋迦の意志にあらざる也、ソークラテースも亦『我は唯だ一事を知れり、我は何事をも知らざることを是れのみ』と謂へりとか、然れども眞に何をも絶對的に知らざる者ならば其人は何ものとも知らずと



すらも謂ふの權利なき也、又莊子が

知止其所不知至矣

知止乎其所不能知矣

と謂ふが如き、一見純粹なる懷疑論と謂はざるを得ざれども、深く其意のある處を察すれば然らず、既に止まると謂ふ即ち是れ止觀し得ればにあらずや、此の流轉的なる宇宙に止觀し得るは本體の知見にあらずして何ぞや、真知にあらずして何ぞや。

### 七項 真知見

スピノーザの説く處によれば、觀念の法に種々區別あるが中に差別見と謂ふものあり、これ相對的現象界の差別見なるが故に不完全

なるもの也、而して莊子の極力排斥したるものは實に是れ也、然れども之に反して真知見と謂ふものあり、一は推理的にして、一は直覺的なりと、若し其れ直覺的智見に至りては誠に平等の見にして宇宙最高の智見也、莊子の真知と謂ひ正知と謂ふものは是れ也、其の極力排斥するものは真知見を隠す處の差別見にてある也、不正知にてある也。

### 八項 唯一神論者

スピノーザが無道理論者にあらず、又無宇宙論者にあらざることは明白也、而して又實に彼は無神論者にあらざる也、純粹なる唯一神を主張する論者也、然れども茲に猶ほ注意すべきは、スピノーザ

の神はかの造物神にあらず、又神人全形論者の神にあらず、意志をも有せず、悟性をも有せざるの神也、獨りスピノーザは唯思考を以て神の本性となすもの也。

### 九項 萬有必然論の根據

『宇宙の萬有は必然的なり、無目的なり』と、是れ實にスピノーザの宇宙に對する斷案也。

思ふにスピノーザの宇宙必然論は最も多く獨乙の哲學者フイヒテによりて考慮されたるが如し、而して主觀的、意志的なるフイヒテはスピノーザが其の必然論を人類にまで應用し來りて、人類を森羅萬象と共に嚴然たる必然の下に屈伏せるものに外ならずとの斷案を

承諾することを得ず、カントの實踐理性批判の説を得て彼の心胸を満足するものとなし、畢に其の傾向を極端まで發展して、宇宙は自我の所造なりとまで叫ぶに至りたるが如し、然れば余は宇宙必然論と無目的論とを説くに當りて、到底通俗的なり難きスピノーザの原文を紹介するよりは、寧ろ明快にして又要領を得たるフイヒテの説を紹介せん、視、よ宇宙の森羅萬象には儼然として因果律の行はれつゝあるを、然れば畢竟柳は緑にして花は紅也、フイヒテは深く宇宙の此の現象を觀じて、彼を環周せる幾多の事物を以て、一つの大きな全躰にして彼等は皆相互的に作用しつゝあるものなりと認めざるを得ざりき、彼は草木、禽獸を視たり、而して各々の個々の者は孰れも相互に區別すべき特性特徴を有せざるはなく、一つの樹は或形

を有し、他の樹は他の形を有し、一つの樹が或形の葉を有すれば、他の樹は更に他の形を有する葉を有す、斯くの如くにして各々の物象は性質の一定の總計を有し、決して其總計より超過せず、又輕減せざる也、否唯だ之のみに止まらず、各々の物は又性質の一定の度を有する也、然れば畢竟『存在せる處のものは徹頭徹尾制約されたるもの也、或一とつ物の物は即ち其一とつ物の物其者にして、畢竟他の何ものにてあらずる也』と、是れフイヒテが自然界を觀察して因果律の實際行はれつゝあることを肯定したるもの也。

### 十項 因果律

『然らば何故に又如何なる理田によりて自然界は自然界が今成りてあるが如くに成りてあるか、何故に自然界はそが取り得る處の無限にして多様な制約の中より、恰かも此の瞬間に於て、自然界が實際に取りたる制約の外、他の何れをも取らざるか』と、是れ次に彼の胸に起り來りたる處の疑問なりき、然れど彼は自答して曰く、『是れ何となれば丁度彼等に先行したるものが實際彼等に先行したるにて、何等の可能なる他のものが先行せざりしが故也、又彼等に丁度現在のものより何等の可能的なる他のものが繼續せざれば也、若し先行の瞬間に於てそがあるより幾ら僅少なるにせよ、兎も角も幾らか異なる他のものなりしならんには、現瞬間に於ても其があるよりは他の何ものかにてあるべし』と、而して先行の瞬間は又其の一つ前の先行の瞬間によりて制約せられ、斯くて遡りて無限に至り、

將來も亦制約又制約と連下して無限に至る、要するに「自然界は絶間なく其の有らゆる可能なる制約の無限の列をなしつゝ進み往く也、而かして此の制約の轉換は無理法にあらずして、嚴格に理法を有するもの也、自然界に存在せる處のものは其がある如く必然的に存在せる也、而かして畢竟そが他のものにてあることは不可能也」と、茲に至りて彼は畢に一つの原理に到達し、之を告白して曰く、「各々の『成』に之よりして生じたる處の一つの『在』を先設し、又各々の『態』に他の『狀』を先考することを要す、畢竟『無』よりしては、何者も發生したりとなすべからず」と、茲に至りて因果律の行はるることはフイヒテの論理的頭腦に確實なりと認識せられぬ。

## 十一項 器械的宇宙觀

フイヒテが自然界に制約ありとする議論は畢に一步を進めて、自己も亦制約中のものなることを肯定するに至りぬ、「我自らも我が所有と名づくる所の總てのものと共に、嚴格なる自然的必然力の鐵鎖の一鏈也」と謂ひ、器械的宇宙觀はフイヒテによりて自然界と人生界との上に適用せられたるを見るべし、而して此の思想は實はフイヒテ自發の思想と謂はんよりは、寧ろスピノーザの思想と見做すべきもの也、然れば余は之よりスピノーザ其人が如何に宇宙無目的論と萬有無善惡論とを論證せしやを説かん。

## 十二項 宇宙無目的論

スピノーザは思へらく、人の宇宙觀と人生觀との誤謬の淵源は、人が自然界の萬有を以て、人間の如く、一つの目的の爲に行動するものと見るが故也、否彼等は實に之に止まらずして神すらも亦何等か一定の目的の爲に行動するものとなせばなりと。

此の思想は最も多く舊約聖書の創世紀の主張と相反するものと謂はざるべからず、何となれば舊約聖書に現はれたる神は意匠を以て天地萬有を創造したる神なれども、スピノーザは之に反して全然自然論者なれば也、若し其れスピノーザの思想に最も近きものを求むれば佛教か、視よ、釋迦は説いて曰く、

星は運れども黙々たり、生死悲苦ある又道理なるかな、宇宙には因果律ありて、恰も波の轉ぶが如し

と、蓋し無常觀と目的觀とは相容れざるものなれば也、嗚呼我等は果して佛教の説に歸すべきか、抑も猶太人の思想に歸すべきか、哲學史上の人傑にして、スピノーザは前者に屬し、ヘーゲルは後者即ち猶太思想たる唯一的創造神の思想を取るもの、如く、ヘーゲル曰く、

論理の世界は何等の蔽ひなき真理其者也、論理なるものは神が世界と其有限なる靈魂とを創造する前に、神自身の本性の中に在り  
— 内容の發展なるかな

と、要するにヘーゲルは宇宙を以て理念の發展と説き、宇宙有目的

説の一種の辨證となしたるものと謂はざるべからず、而して茲に又忘却すべからざる他の一種の見解あり、即ち是れショーペンハワーの見解也、ショーペンハワーは宇宙を以て盲目的意志、即ち慾求煩悩の發動となすもの也、既に宇宙を以て意志となす、スピノーザの思考本體説と異なる也、又既に盲目的と謂ふ、ヘーゲルの理念發展説と異なる也。

### 十二項 萬物は人間の爲に存せずとの説

スピノーザは思へらく、俗人は神が天地萬物を人間の爲に造れりと思惟す、是れ大なる妄想なりと。

實にや艶に咲き匂へる花も、又花間に舞へる蝴蝶も、古人は之を以て人を樂しませんが爲に咲き又舞ふものとなせり、然れども近世の科學者は説明して曰く、是れ花が種屬維持の爲に美はしく咲き出で、花粉の媒介者たる蝴蝶を誘ふものなりと、知るべし俗人の神は天地萬物を人間の爲に造れりと謂ふ思想は眞理にあらざるを、スピノーザは此の意味に於て確かに人類てふ生物の利己的なる大々の妄想を打破したるものと謂ふべき也。

### 十四項 此の誤想の原因は利用心

スピノーザは思へらく、人が天地萬物を以て人間の爲に存在すと誤想する原因は、畢竟人間は自己の利用の爲に行動するものなるが故に天地萬物を觀察するに、是の利用心を解脱すること能はず、畢

に天地萬物の一切を以て人類てふ種屬の爲に存在すと誤想するに至りたるなりと。

スピノーザが人類思想の大誤謬の淵源を人類の利用思想に在りとなすは、實に大なる卓見にして、其の言の來る處、極めて深しと謂はざるべからず。此を今少しく平易に吾人の慣用の語に譯すれば、即ち人類の利慾心は有らゆる妄見の原因なりと謂ふこと也、視よ佛教に於て人生を煩惱界より救はんとするや、必らず斷慾を説き、沒我を説く、是れ何故ぞや、斷慾と沒我とは人をして轉迷開悟せしむるの必要條件なれば也。

慾を消しなば實在も死も火の如くに消ゆと、是れ豈佛教の根本思想にあらずや。

### 十五項 自然宗教の生因

スピノーザは思へらく、人間は世に幾多の利用に供せらるゝものゝ存するを見る、例へば眼は見るに、齒は噛むに、植物と動物とは食料となすに、太陽は照らすに、海は魚を養ふ爲に等是れ也、斯くて自然界の總てのものを彼等の利用の供給なりと觀せざる莫し、而して彼等は此の供給物たるや、彼等の之を造りたるものにあらずして、發見したるものなりとなすが故に、茲に於てか彼等以外に何者かありて、彼等の利用の爲に、此の供給物を備へ呉れたりとの信仰は起り來る也、蓋し彼等既に一度事物を以て手段なりと觀するや、彼等は最早や彼等が自存的のものなることを信すること能はず、却

て其の經驗より推測して思へらく、宇宙に唯一の若しくは幾多の、  
彼等の爲に萬有を與へ、又彼等の利用の爲に萬有を造りたる、人間  
的自由を具有せる自然界の指導者なかるべからず、而して其の神  
々は萬有を人間の利用の爲に造り、人間をして自己等を崇拜せしめ  
んとするなりと説くに至ると。

疑もなくスピノーザは自然宗教の生因の一大淵源を説破したるも  
の謂ふべし、然れども自然宗教の生因たる此の現象は果してスピ  
ノーザの謂ふ如く、單に人類の利用思想の結果として蔑視し去るべ  
きものなりや、宇宙に内在する眞善美こそ實に宗教思想の大淵源な  
らざるなきを得んや。

### 十六項 祭神の根源

スピノーザは思へらく、斯くて人は神が或特定の人物を他の人間  
に優りて愛し、又全自然界を其人の盲目的なる慾望と飽くなきの貪  
慾との爲に枉げらるものなりとして各自神を祭るの方式を種々其の  
頭中にて考へ、斯くて畢に殆ど変除し能はざる迷信の根原をなせり  
と。

創世紀に録せるカインとアベルとの記事の如き、又モーセが紅海  
を渡るの紀事等皆歴々としてスピノーザの言の當れるを徴すべし、  
然り斯かる思想は其極醫すべからざる迷信に陥ること之れ又吾人  
の全感する處也、預言者イザヤの如きも既に之を喝破して曰く、



「ホバ言たまはく、汝等が獻ぐる多くの犠牲は我に何の益あらんや、我はさひつちの燔祭と肥たるけものにと飽けり」と、然れども偉大なる人格は往々或範圍に於て宇宙の超常理勢を希求し、又之を喚起することを忘るべからざる也。

### 十七項 造物神論者打破

スピノーザは思へらく、人々は自然なるものが徒らに（即ち人間に何等の利用關係なしに）活動せざることを示さんことを求む、而して余の見るが如くんば彼等は畢竟自然は神と共に人間と一様に狂氣的なることを示すに外ならず、請ふ見よ斯かる迷信が遂に如何に歸着するかを、自然界中さしも多く利用あるものの中に、彼等は嵐

の如き、地震の如き、疾病の如き少なからざる有害なるものを認めざるを得ざる也、茲に至りて彼等は主張して謂ふ、是れ神々が人間の爲したる罪惡に對して義怒し給ふなりと、而かして此の思想は無数の例證によりて經驗に矛盾するとは謂へ、例へば信心深き者も不信心なる者も、忽ちにして利益を得、又忽ちにして損害を蒙むるも、而かも彼等は猶ほ其の深く根させる臆斷を捨てず、何となれば彼等の全き思想系を破粹して新らしきものを案出するよりも、之を彼等が其の利用を知らざる他の未知のものに歸し、彼等の現實の又固有の無知識の状態に固執する方容易なれば也、是の故に彼等は神々のみ旨は人間の理解力を超ゆることを確かなることなし、眞理は人間種屬に永遠に隠れて止まるものなりとなす。

スピノーザの造物神論者を打破する論鋒や洵に鋭利なりと評すべし、吾人も亦人の所謂意義に於ては物質世界を以て理想的圓滿の世界となすものにあらず、物質世界には人生に有害なるもの實に多々なるを認むるもの也、然れども吾人は此の有害なるものを説明するに、必らずしも神の義怒を以て之をなすものにあらず、吾人は之を眞、善、美其者の本來の性質の相違せるに原因を歸して説明せんと欲する也。

花は人の以て美とする處のもの也、糞尿は人の以て醜とする處のもの也、然らば花は即ち可にして糞尿は即ち不可なるや、何ぞ其れ然らん、花の美は肥料としての糞尿の實効あること即ち眞なることの結果ならざるべからず、然らば即ち糞尿を可とすること猶ほ花を

可とするが如くならざるべからず。

既に糞尿を可とすと謂ふは取りも直さず糞尿の特性たる臭氣を可とするもの也、アンモニヤを可とするもの也、之れ美と眞とは其の性質を異にし、互に矛盾することあり、然れど人格の大觀の能力は能く兩者を統觀することを得るとの例證也。

### 十八項 無上の毒説乎否乎

スピノーザは思へらく、自然界は決して何等の目的を有するものにあらず、有らゆる宇宙目的觀なるものは畢竟人類の想像なることは多言を要せず、何となれば自然界の萬有は或一定の永遠的必然果た最高の圓滿よりして發出したるものなれば也、然れども余は尙ほ

自然界有目的説なるものは、自然界を全然頭上に於て構成するものなることを附言せんと欲す、何となれば彼等は實際は原因なる處のものを結果なりとして考へ、又實際は結果なるものを原因なりとして考ふれば也、復た彼等は自然界に於て最初にありし處のものを最終にあるべきものとなせば也、且つ彼等は最高にして又最も圓滿なるものを最も不圓滿なるものとなせば也。

スピノーザの宇宙無目的論を沈思默考すれば、吾人は殆ど其の哲學系統の偉大に吞まれんとす、視よ蝸牛角上の争鬪を事とせる輩は措いて問はずとするも、人生の進化を思惟し、社會の改良を信じて努力しつゝある者、孰れも畢竟宇宙無目的論の前には靦靦たるものなれば也。

太陽光を失ふと假定せよ、星は墮ち來ると假定せよ、嗚呼渾沌進、化を説く學者の聲何處にかあるべき、紀念牌と功罪録と何處にかあるべき、而して是れ杞憂の如しと雖も、亦可能のこと也、(況んや人生には誰にも死てふ主觀的世界滅亡の眼前に横りつゝあるをや)斯くの如くにして尙ほ宇宙有目的論を唱ふべきや。

世の一般の學究と道學先生とはスピノーザの宇宙無目的論を以て無上の毒説となさん、然れども彼等は果してスピノーザの思想を否定するに足る丈けの論據ありや、余は寧ろ莊子の言を假りてスピノーザと世の道學先生等の言とを次の如くに評して謂はん、

大知閑々小知問問、大言炎炎小言詹詹

と、余は之を莊子に於て讀む、

惠子謂<sub>二</sub>莊子曰、吾有<sub>二</sub>大樹<sub>一</sub>、人謂<sub>二</sub>之樗<sub>一</sub>、其大本擁腫而不<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>繩墨<sub>一</sub>、其小枝卷曲而不<sub>レ</sub>中<sub>二</sub>規矩<sub>一</sub>、立<sub>二</sub>之塗<sub>一</sub>、匠者不<sub>レ</sub>顧、今子之言大而無<sub>レ</sub>用、衆所<sub>二</sub>同去<sub>一</sub>也

と、何ぞ其れ樗のスピノーザの宇宙無目的論に比するの屈竟なるよ、然れを聴け、莊子は惠子の言に向つて如何に應へしか、

今子有<sub>二</sub>大樹<sub>一</sub>、患<sub>二</sub>其無<sub>レ</sub>用<sub>一</sub>、何不<sub>レ</sub>樹<sub>二</sub>之於<sub>二</sub>無何有之郷<sub>一</sub>、廣莫之野、彷徨乎無<sub>二</sub>爲其側<sub>一</sub>、逍遙乎寢<sub>二</sub>臥其下<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>夭<sub>二</sub>斤斧<sub>一</sub>、物無<sub>二</sub>害者<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>可用、安所<sub>二</sub>用苦<sub>一</sub>哉

### 十九項 宇宙有目的論の弊害

スピノーザは思へらく、宇宙に目的ありてふ教は神の圓滿性を否

定するもの也、何となれば神にして或一つの目的の爲に行動すとせば彼が欲きたる何ものかを必らず慾求する筈なれば也、假令神學者と哲學者とは、要求的目的と全化的目的との區別を立つるとは謂へ、而かも彼等は神は總てを被造物の爲にあらずして、彼自身の爲になしたることを告白せざるべからず、何となれば彼等は神が爲に供給せんと欲せし事物を欲きたりしことを必然的に許さざるべからず、是れ自明の真理なればなりと。

スピノーザの論法は絶對觀なくして唯々相對的活動をのみ觀る論者に向つては一大痛棒と謂はざるべからず。

### 二十項 無知識てふ避難所

スピノーザは思へらく、宇宙の萬有に目的ありと説く論者が實際萬有の目的を説明することを得ざるに至るや、常に所謂『無知識てム避難所』に入り、萬事を神意に歸せんとす、斯くて此等の論者が人體の構造を瞥見するや、彼等は驚愕して而して此の大なる美術的作物の原因を知らざるが故に、遂に人體は器械的にあらずして、實に神的なる果た超自然的なる技術によりて、何れの部分も他を害せざる様に形成され構成されたるものなりとなす、斯くて奇蹟的なるもの、眞原因を鑿索する處の人々、又は自然的なる事物の道理を知らんと努力する人々は賢者として敬歎せられざるのみか、人民等が自然と神との通譯者として崇ぶ僧侶等によりて、異端者又は悪人として待遇せられ又誹謗せらるゝ也、何となれば彼等は彼等が以て彼等の教理を證明し、又彼等の地位を保つ唯一の手段と信する無知識論も奇蹟も之によりて消失し去るべければ也。

思ふにスピノーザの此の言論は地動説を唱へたるガリレオ、ジョルダノブルノー等、其他又かの進化論を唱へたる幾多の人士等の何故に奇禍を買ふに至りしやを説明して餘りあり、嗚呼東西古今時俗の犠牲に供せらるゝは天才の士の止むを得ざるの運命なるか、宜なり、ゲーテは眞理を赤裸々に告白したる者は十字架に懸けられ、又は焚刑に處せられたりと云へり、然らば我等は口を噤んで公明正大なる眞理を唱ふることを避くべきや、然らず、古人曰く、其の肉體を殺すも靈魂を殺すこと能はざるものを懼るゝこと勿れと、我等何ぞ奮起せざるを得んや、既に天下の廣處に居り、天下の公道に立ち

て大聲疾呼す、吾人は何時か吾人の精神が天下を貫ぬくの日あるを信じて疑はざる也。

## 二十一項 無善惡美醜論

スピノーザは思へらく、人類が既に宇宙間に起りたる總てのものは彼等の爲に起りたるものと一と度考へたる後は、彼等は各々の事物に就きて彼等に有用なるや否やを最も主要なる問題となし、又それが彼等に對つて最も快よく働らさかくるや否やを以て最も多く貴重な標準となす、故に彼等は事物の性質を證明せんが爲に、善、惡、美、醜、秩序、不秩序、寒、暖等の觀念を構成す、又彼等は自己を以て自由なるものなりと考ふるが故に、賞讃、非難、罪惡及び功德

等の觀念を構成す、總て健康に有益なる又は神を崇拜するに供するものは人之を呼んで善と謂ひ、之に反對なるものをば人之を呼んで惡と謂ふ、彼等は事物の本性其者を知らず、又事物自身に就きて何れをも主張せず、却て唯だ事物を官能的に表象し、又官能的表象を知識と思惟するが故に事物と其の性質の知識によりて遂に事物の秩序なるものを固信するに至る也、何となれば事物にして若し我等の官能によりて表象せらるゝ時、表象し易く、又從ひて容易に我等に回想され得るならば、我等は之を善く秩序立てられたりと謂ひ、之と反對なる場合には之を惡く又は混雜して排置せられたりと謂ふ、而して我等が容易に表象し得るものは然らざるものよりも快よきが故に、人は混亂よりも秩序を重んじ、恰かも我等の表象により

て見らるゝ秩序は幾らか自然界中に存するが如くに感ずる也、彼等は又謂ふ、神は總てを秩序の中に造りたりと、又全じ流儀にて神を知らずして而かも官能的に之を表象すと。

大膽なるスピノーザは善、惡、美、醜の概念を根本的に打破して、是等のものは畢竟人類の萬有を表象することの易きと又易からざるに原因して、事物其れ自身の性質にあらずとなせり、確かに破天荒の議論と謂ふべき也。

## ノ二十二項 趣味無標準論

スピノーザは思へらく、善、惡、美、醜等は畢竟想像力が諸種の方式の上に惹起したる觀念の種類に他ならず、然れど無智識なる人

々には、事物の主要なる屬性として思惟せらる、何となれば彼等は余が既に謂ひしが如く、萬有は彼等の爲に造られたりとの意見を有すれば也、斯くて彼等は一つの事物の性質を、之によりて刺戟せらるゝ儘に、善或は惡、健全、腐敗等と名づく、視よ鼻を通じて官能を刺戟するものを人は之を呼んで馨ばし又は臭しと名づけ、舌によるものを甘し又は苦し、味好し、又は味惡し等と名づく、觸覺によるものを堅し、又は柔らかし、荒し、又は滑らかし等と名づけ、最後に聽覺に就きては彼等は燥音又は樂音と稱す、若し其れ樂音に至りては彼等は神自身が諧音を奏して樂しみ給ふものと愚かにも惑へり、斯くて天體の運動が一つの調和を有することを證かし、たる哲學者すらもありき、是の總ては各人が彼の頭腦の状態に従ひて事物

を批判し、或は寧ろ想像力の發動を事物其れ自身と見做すによる也、然れば我等が経験する如く、人間の中に多くの意見の論争の成立し、遂には懷疑論者の出るに至ることは不可思議にあらず、何となれば人々の身體は到底多くの點に於て互に異なる處あるを免れず、故に屢々或物は一人に善く思はれ、他人に悪しく思はれ、甲の人には秩序よく乙の人には亂れて思はれ、一人には快よく、他人には不快に思はる、萬事皆斯くの如し、然れど余は此の點に就きては多くを謂はざるべし、何となれば今は此の問題に就きて論ずべき場合にあらず、又各人皆既に之に就きては充分の経験を有すれば也、視よ、各人は異口同音に次の格言を唱ふるにあらずや、『頭の數の多き丈け其れ丈け議論の數も多し』と、又は『人の趣味は頭の異なるが如く其れく

異れり』と、此の格言は人間が彼等の頭腦の状態に従ひて事物を批判し、又彼等が事物を眞に認識することは之を官能的に表象するよりも、より少きことは多言を要せずとのことを證す、何となれば若し人間が事物を眞に認識せしならんには（彼等が唯だ之を官能的に表象することの代りに）彼等は蓋し（主觀的）の趣味は相互に異りて、或者は之を取り、他の者は之を避くるとも、然れども（客觀的）の批評に於ては、數學の定理の如く一般的に承認することを得べければなりと。

東洋には莊子ありて、スピノーザの謂ひたる旨趣と全じきことを精論せり、即ち齊物論に於て説いて曰く、

方可方不可、方不可方可



此の所謂方生の説なるものは正しくスピノーザの意見と全一ならずや、又彼は物各々其の趣味を異にすることを説きて曰く、

民芻豢、麋鹿食<sub>レ</sub>蔞、螂蛆甘<sub>レ</sub>滯、鴟鴞嗜<sub>レ</sub>鼠、四者孰知<sub>二</sub>正味<sub>一</sub>、  
 猿狙狙以爲<sub>レ</sub>惟、麋與<sub>レ</sub>鹿交、鮪與<sub>レ</sub>魚游、毛嬙麗姬、人之所<sub>レ</sub>美也、  
 魚見<sub>レ</sub>之深入、鳥見<sub>レ</sub>之高飛、麋鹿見<sub>レ</sub>之決噪、四者孰知<sub>二</sub>天下之正  
 色<sub>一</sub>哉

と、懷疑論の社會に起る復た實に其の故あるかな。

### 二十三項 空名論

スピノーザは思へらく、我等は俗人等が自然界を説明する爲に用ゆる總ての觀念は唯だ種々の表象の種類にして、事物其れ自身の性

質にあらざるを見る、又彼等は實在せる本體の外實際に存在する如く思惟せる名なるものを有すと。

莊子の如きも未熟なる人の言語につき之を詆りて曰く、  
 其以爲<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>於鼓聲<sub>一</sub>亦有<sub>レ</sub>辨乎、其無<sub>レ</sub>辨乎

と、夫れ莊子は既に未熟なる人の言語を以て鼓即ちヒイナの聲に比し、其の辨すべからざるを説く、

然れども莊子は又曰く、

夫隨<sub>二</sub>其成心<sub>一</sub>而師<sub>レ</sub>之、誰獨且無師乎

と、嗚呼偉大なるかな莊子の言、成心とは是れ渾然として天理と一となれる心にあらずや、朱子が大學の明德なる語の註に『人之所得<sub>二</sub>乎天<sub>一</sub>而虛靈不<sub>レ</sub>昧、以具<sub>二</sub>衆理<sub>一</sub>而應<sub>二</sub>萬事<sub>一</sub>者也』と、謂へるもの

豈是れにあらずや、人間の言語も茲に至りては實に一箇の天啓たるを失はざる也。

## 二十四項 宇宙的氣魄

スピノーザは思へらく、多くの人々は往々次の如き議論を提出し來りて云ふ、若し萬有は神の最も圓滿なる性質の必然によりて結果したるものなりとせば、何處よりしてか、かの事物の腐敗、惡臭、或は人をして嘔吐を催さしむる醜くきこと、不秩序、罪惡等、さしも多くの自然界の不完全は生ずるやと、然れど是の議論は容易に屈伏せしむることを得、何となれば事物の完全は唯だ彼等の性質と能力とに従ひて値ふむべきものにて、之が人間の性質に適するや否や

に従ひ、又は人間の官能の或者を樂しましめ、又は不快ならしむるやに従ひ高下すべきものにあらざれば也、然れど若しそれ神は何故に總ての人間を理性のみに因りて生活するやうに造り給はざりしやとの問に對しては、余は唯だ次の如く答へん、蓋し神は圓滿の最高より最低度に至る迄の一切を作るべき材料を有したればなりと。

余は之を莊子に於て讀む、彼は天下の何物も不可なるなきを説いて曰く、

物固有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>然、物固有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>可、無<sub>ニ</sub>物不<sub>レ</sub>然、無<sub>ニ</sub>物不<sub>レ</sub>可

と、莊子は既に此の宇宙的見地に立つ、何すれを偏見に陥ららんや、然れば彼は更に一步を進めて曰く、

故爲<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>、莖與<sub>レ</sub>楹厲與<sub>レ</sub>西施<sub>レ</sub>、恢、惓、慄、怪、通爲<sub>レ</sub>一

と、蓋し蕙はウツパリにして、盪は大黒柱也、厲は容貌の醜なるを謂ひ、西施は人の知れる如く、春秋の世越國に生れたる美女也、恢は偏狭の反對にして、惓は循常の反對、慍は平直の反對、怪は祥瑞の反對也、若し其れ達人の眼中に於ては是等のもの皆一に歸する也、何ぞ又是等のものを生じたる天を怪しまんや、人は茲に至りて誠に一つの超人なるかな、スピノーザの理想も又實に茲に在り、我も亦之に全感なり、莊子は吾人の爲に此の境にある超人の徳を説いて曰く、

之人也、之徳也、將<sub>レ</sub>旁<sub>ニ</sub>禱<sub>ニ</sub>萬物<sub>一</sub>以爲<sub>レ</sub>一

## 二十五項 一元的平行論

スピノーザの心と物とに關する見解は、一般に人の信ずる處によれば平行論的見解也、曰く心と物とは猶ほ平行なる二線が無限に接觸することなくして延長せらるゝ如し、兩者は共に本體の二つの相異なる屬性にして永遠に相互に制限することなくして併存す、スピノーザは此の平行論の根本原理を説いて曰く、

物體は思考によりて、思考は又物體によりて制限せらるゝことを得ず

と、茲に吾人の大に注意すべき事柄あり、何ぞや曰く、スピノーザはデークルトの宇宙を物と心との二元に峻別したる二元説を一元説に改革したる哲人なりとは稱すれども、其の一元論たるや、唯心的一元論若しくは唯物的一元論の如き、單純なる一元論にあらずして、

屬性てふ名の下に、本體なるものが物と心なる二つの徹頭徹尾峻別すべきものを包有することは是れ也、熟々余はスピノーザの思想の發展の模様を考ふるに、彼は一面デークルトの説に入りてデークルトの説を脱却し、又他の一面に於てはデークルトの説を脱却して而かもデークルトの説を持したるもの也、請ふスピノーザと思想の全一琴線に觸れたるフイヒテの平行論を聽かしめよ、曰く、

我は我がそを考へ又そを欲するが故に現在の我たるにてはあらず、又我がそれにてあるが故に我はそを考へ又はそを欲するにあらず、却て我は在りて而して考ふる也、兩者は究竟的也、然れど兩者は更に大なる根底によりて統一せらる

と。

## 二十六項 思考と延長

スピノーザは思へらく、宇宙の本體即ち神は思考と延長との屬性を有し給ふ、故に

思考は神の屬性也、即ち神は思考者也

との命題を得、又

延長は神の屬性也、即ち神は延長者也

との命題を得と、且つ彼は之を證明して曰く、

個々の思考は神の性質の或る一定の方式にて表白せられたる状態也、而して状態には之を一貫する屬性なかるべからず、即ち思考は宇宙に實在する一の屬性也、然れば宇宙の本體たる神は無論此

の思考てふ屬性を有し給ふ、即ち思考なるものは神の中にあるものなりと謂ふことを得、是れ神は思考者なりとの證明也、神が延長者なりとのことも全一の論法にて知らる

### 二十七項 無限的思考者

スピノーザは思へらく、神は無限なるものを無限に思考するものなり、既に思考あり、されば又觀念なかるべからずと、蓋し觀念とは思考者たるが形造る處の心像也、然ればスピノーザは次の命題を與へて曰く、

神には必然的に其の本質及び之より必然的に發出する總てのもの

、觀念あり

と、而して彼は之を證明して曰く何となれば神は無限なるものを無限の状態にて考ふことを得、即ち神は其の本質及び之より發出する總てのもの、觀念を形成することを得、然るに神の力の中に立てる總てのものは必然的也、故に又必然的に斯かる觀念ある也、彼又曰く、

無限なるものを無限の状態に發出する神は唯一ならざるを得ずと。

### 二十八項 心と物との特殊的本領

スピノーザは思へらく神は心を物の下に、又は物を心の下に觀察

し給はず、心を心の下に、物を物の下に観察し給ふと。

蓋し神は心と物との孰にもあらずして、両者を屬性とするものなるが故に、神をば假りに一切の心の原因たる一大の心とせよ、又は一切の物の根本たる一大の物とせよ、然れども一大の心としたる神を以て物の原因と叫做し、又は一大の物としたる神を以て心の原因と見做すべからずとの謂也、思ふに此の項は頗ぶる重要なるものにして、スピノーザは之を以て一面造物主論を打破し、又他の一面唯物論者を打破したる也。

### 二十九項 觀念と事物との秩序結合の

一致

スピノーザは思へらく、觀念の秩序と結合とは、事物の秩序と結合と全一也と。

本項の問題は即ちかのライブニッツが預定調和説を以て説明せんと欲したる處のもの也、ライブニッツの預定調和説なるものは、彼の哲學の難關たる也、之に反して流石は一元論者なるスピノーザは洒々落として之を一元的に説き去らんとす、其の議論や極めて明快なるものある也。

### 三十項 空想即實在論

スピノーザは思へらく、心と物との結合は一致するものなるが故に次のことを謂ふことを得、神の力を考ふことは神の實際の力を

行使するに等し、即ち神の無限性より形式的に出る處の總てのものは、神の觀念よりして之と全様の秩序と結合とに於て客觀的に神の中に生ずるなりと。

余は此項を読んで覺えず案を打つてスピノーザの中に余と肝膽相照するものあるを視て歡喜しぬ、何が故ぞや、曰く、余は之を余が胸中に藏せる「空想は實在也」との思想に極めて類似したる學說をスピノーザに於て發見したれば也、超意識的なるかな、超意識的なるかな、人類世界の大概は此超意識的世界の存在を識らざるに歸す、既に意識的世界を以て究竟となす、故に彼等は俗物とならずんば即ち學究と也、若しくは偏狹なる道學先生となる也、余は人類をして之の超意識的世界に其根底を置きて、人格の品位を持しつゝ此の有形世界に活動せしめんと欲す。

### 三十一項 空想大道德論

スピノーザは思へらく、宇宙の本體の延長の存在形式と此の存在形式の觀念とは唯だ二種の態様に表白せられたる全一物也、是の事は一二のヘブレンヤ人に臆ろげながら悟られたりと見へ、彼等は主張して曰く、神と神の智慧と神によりて認識せらるゝものとは全一物也と、今事例を假りて之を説明すれば、自然界に存在する圓の二つと、一とつの存在せる圓の觀念とは特種ある屬性に表白せられたる全一物也と。

神と、神の智慧と、神に認識せらるゝものとは全一物なりとの原理

は決して輕々に看過すべき事にあらざる也、何となれば人格には佛神あれば也、然れば是の原理や直ちに人格上の原理也、吾人は固より空想したるものを物質界に存在すとは稱せず、又斯く謂ふの要なく、何となれば吾人は物質的實在てふ形式を認むると全様に空想的實在てふ形式を認むるものなれば也、此の原理を利用すれば余は實に社會に大道德を生せしめ得べしと信する也、其故如何にとなれば請ふ徐ろに聽け、基督の言に『古の人に姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹が聞く所なり、然れど我なんぢらに告ん凡そ婦を見て色情を起す者は中心すでに姦淫したる也』とあるは正に之の原理の應用に外ならざるにあらずや。

余は聖書に於て之を讀む、基督嘗てガリラヤ湖の波濤を踏んで弟子達の船に至る、シモンペテロは愈々基督なるを視るや、又海を踏んで基督の處に往かんとせしが、忽ちにして彼恐怖を感じて將に溺れんとす、基督は爾信仰薄き者よと謂ひつゝ、ペテロを扶けて船に乘らしめたりと、讀者よ之れ何を意味するとなすぞ、思ふに偉人は時ありてか波浪を踏んで往くが如き超常理のことある也、然れども常人は到底其大膽と確信となさき也、空想は猶ほ波浪の上を蹈む途の如く、船行は猶ほ常識的の途の如きか、然らば通常人の如きは焉んぞペテロの流なるなきを知らんや、何となれば彼等は空想の弱點を餘りに恐怖すれば也、吾人は既に前に論じたる如く、空想は之を空想的實在として樂しめと説くものにして、固より客觀的に全然之を實現せよとの主意にはあらず、然れども大に語勢を強めて今の時代



には空想の福音を説くの要あるかな、基督が『我と父とは一也』と謂ひ、或は又『我は途也、眞也、生命也』と謂ひ、若しくは『我は葡萄の樹、汝等は其枝也、人若し我に居り、我亦彼に居ば多の實を結ぶべし』と謂ひ、若しくは『天に在りて天より降り天に居る人の子』等と縦横自在に其の空想を吐きたるは大なるかな、而かも其の詩的空想を人格の上に實現するの大意力を有したりしは尊むに堪わたり、之を要するに人は茲に所謂空想即ち神秘的情感の價値を決して忘るべからざる也、若し之を失はば社會は下劣なる獸的生存競争の場所となり、又一大機械場と化し終らん。

### 三十二項 神 人

スピノーザは思へらく、存在せざる個體若しくは存在形式は神の無限の觀念中に含有せらるると。

偉大なるかなスピノーザの言、存在せざるの個物若しくは存在形式が神の中に存在すと謂へるは、洵に壯快淋漓の言也、此の言なくんば安くんぞ大積極主義と謂ふことを得んや、吾人は徹頭徹尾此の論法を以て勇往邁進せんと欲す、人あり余に問ふてかの莊子が

藐姑射之山、有<sub>二</sub>神人<sub>一</sub>居焉、肌膚若<sub>二</sub>冰雪<sub>一</sub>、綽約若<sub>二</sub>處子<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>食<sub>二</sub>五穀<sub>一</sub>、吸<sub>レ</sub>風飲<sub>レ</sub>露、乘<sub>二</sub>雲氣<sub>一</sub>御<sub>二</sub>飛龍<sub>一</sub>而遊<sub>二</sub>乎四海之外<sub>一</sub>、其神凝使<sub>下</sub>物不<sub>二</sub>疵癘<sub>一</sub>而年穀熟<sub>上</sub>

と謂へる藐姑射之山の神人をも君は信せんと欲するかと謂はんに、余は寧ろ應へて然りと謂はんと欲す、讀者請ふ心靜かに余の辨を聽

けよ、余の辨一言以て之を蔽へば莊子の神人の空想は歴史上耶蘇基督に於て偶然其の權化を見たりと謂ふにあり、何を以てか之を謂ふ、曰く、藐姑射の山は即ち神の宮殿として目せらるゝシオンの山と見ることを得、然るに視よ基督は常に神殿に居れり、何となれば彼は彼自身を以て神殿なりと信じたれば也、聖書に曰く、基督十二歳の時エルサレムの宮殿に在り、學者法教師等と談論し、両親の尋ね來るに及びて謂ひけるは『何故我を尋ぬるや我は我父の事を務むべきを知らざる乎』又は『子は父の家にあるを知らざる乎』との意を述べたり、以て彼が幼時よりして自己は神殿に在りとの情を有せしを察すべき也、又彼が自己の身體其者を神殿と意識し、エルサレムの宮殿を毀ちて三日目に之を建設せんと放言したること、又彼が自己

を神殿なりと信じたるを證するに足らん、故に曰く、藐姑射之山有神人<sub>ニ</sub>居焉と、然らば肌膚若<sub>ニ</sub>氷雪<sub>一</sub>とは如何、曰く基督のタボール山の變貌は即ち是也、聖書に記して曰く、

耶蘇潜携<sub>ニ</sub>彼得雅各約翰<sub>一</sub>至<sub>ニ</sub>高山<sub>一</sub>當<sub>レ</sub>前變化、其衣燦爛皎白如<sub>レ</sub>雪と、以て證とすべき也、然らば綽約若<sub>ニ</sub>處子<sub>一</sub>とは如何、曰く、耶蘇の性格や内剛にして外即ち柔、然れば洗者ヨハナは耶蘇の風采を評して、『神の羔を視よ』と謂ひぬ、又耶蘇の一生涯大に彼に全情を表し、慰安を與へたる者は何人なりしぞ、曰く、婦人なりし也、見よ耶蘇に接してはペテロの母も、約翰の母ザロメも、マルタも、マリヤも、其他幾多の或は富める、或は悔改したる婦人、皆彼に對して愛敬の念を懷きし也、識るべし耶蘇は全然たる木強漢にあらざりし

を、然れば基督教道徳の多くは大に女性的の分子を含めり、愛の如き、温和の如き、謙遜の如き、皆其例證にあらずや、余は綽約若<sub>二</sub>處子<sub>一</sub>とは寧ろ良く基督を形容し得たりと信する也、然らば不<sub>レ</sub>食<sub>二</sub>五穀<sub>一</sub>とは何ぞや、曰く耶蘇サマリヤの婦に教訓し畢り、恰かも婦の去りし時、弟子達が邑より食を求め來りて、耶蘇に食せんことを請ひし時、耶蘇之に應へて曰く、

我有<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>食之糧<sub>一</sub>爾所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>知者

と謂ひしが如き、以て彼が物質的の麵麩以上のものを食ひつゝありしを證するに足らん、然らば吸<sub>レ</sub>風飲<sub>レ</sub>露とは如何、曰く、ガリラヤ湖上基督が風に御し海を踏んで弟子の船に往けるが如き奇蹟談、又基督が人なき草野の露に身をそぼちつゝ、且つ祈り且つ默想せしが

如き、之れ吸<sub>レ</sub>風飲<sub>レ</sub>露ものにあらずして何ぞや、然らば乘<sub>二</sub>雲氣<sub>一</sub>御<sub>二</sub>飛龍<sub>一</sub>とは何の謂ぞや、曰く、基督自ら人の子の榮光の雲に乗りて來るを見んと謂ひしが如き、又其上天の奇蹟談の如き、以て乘<sub>二</sub>雲氣<sub>一</sub>との證となすべく、又基督の復活は屢々かのフェニクス（蘇生鳥）と稱する鷲の如きものによりて詩人に表徴せらる、東洋流に之を謂へばそれ飛龍か、然らば物不<sub>二</sub>疵癘<sub>一</sub>とは何ぞや、曰く、十字架上の基督が飽く迄も其の苦を嘗めんと欲して、人々が没藥を酒に和して飲ませんとしたるを拒絶したる膽力は、豈是れ基督を大死一番して復活せしめたる力にあらずや、然らば『年穀をして熟せしむ』とは何ぞや、基督一度死して多くの義人を輩出せしめたり、之れ所謂一粒朽ちて萬粒を生かしむるものにあらずや、斯くの如く見來れば、畢竟

藐姑射之山の神人てふ荒唐なる無稽的の人物は活ける基督に其の權化を得たるを見る、あゝ莊子は嘗て基督を見ず、又基督の語を聞かざりき、而かも能く基督を描出し得たり、世に斯かる眼光もて基督を見、又聖書を解すること能はず、神秘的太空想の福音を解せざる者は、莊子に對して大に忸怩たるべき也、莊子の如きは眞に基督の所謂『見ずして信じたる人』なるかな、而して之れ豈かの其の眼と其の知識との外に其の心の逍遙すること能はざる底の人物の能くし得る處ならんや、茲に於てか余は思ふ存在せざる個體の觀念すらも神の中に存在すと謂ひ、スピノーザ哲學の如き、蓋し人をして大自由の世界に生活せしむる大なる福音と謂ふべき也。

### 三十三項 大斷案

神は絶對的の無限者にして、無限の屬性を有し、無限の實在を發し、必然的に存在し給ふ、何となれば神の存在と其の本質とは全一なれば也、神の他には本跡あること能はず、又之を思惟すること能はず、而して神は自性の律に従ひて行動し、何ものにも強制され給はず、何となれば神の力と其の本質とは全一なれば也、視よ一切は神の中に在り、何ものも神無しには存在すること能はず、又思惟せらるゝこと能はず、神は實に宇宙の絶對的第一原因也、然り神は獨り存在物の活動的原因なるのみならず、又實に其の本質也、然れば自然界中には偶然なるもの無く、一切は神の性質の爲に或形式に

て存在し又働らくべく規定さる、若し其れ智と意とか神の永遠なる本質に屬すとせば、之の兩屬性の各々の下に通常意味せらるゝより、必らずや他の何ものか、意味せられざるべからず、即ち神の本質を形成すべき智と意とは、我等の智と意とに比して天地の大懸隔なるべからず、何となれば人間の智と意とは神の無限なる智と意との一部分に過ぎざれば也、世には神を人間の如く、肉體と靈魂とより成り立ち、情慾的ある者の如く表象する人々あり、然れど之れ等は正當なる神の觀念より遠ざかること夥し、神は一切の卑しき世俗的の快苦の情に動かされ給ふこと無く、唯々無限なる智力的の愛をもて自を愛し給ふと、如是は即ちスピノーザの神に関する大斷案也。

神終

明治三十九年三月十二日印刷  
 明治三十九年三月十五日發行

(定價 金貳拾錢)  
 郵税金不納

東京市小石川區高田老松町十八番地

著者 齋木延次郎  
 發行者

東京市外神田區籠町二丁目拾壹番地

印刷者 安藤忠容

同上

印刷所 廣業館

大賣捌(東京堂、有朋館、上田屋)

R-63

